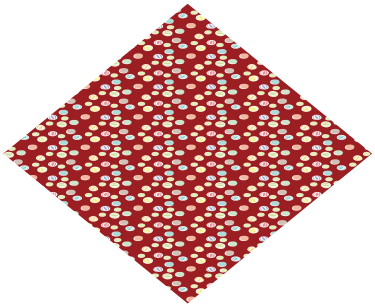
ALCE 言語文化教育研究学会
Association for Language and Cultural Education

言語文化教育研究学会月例会企画

田島充士さんとの対話

バフチンおよびヴィゴツキー理論と言語文化教育



2月9日(木)18:00~20:00

会場:早稲田大学早稲田キャンパス 22 号館 719 教室
参加費:無料
予約:不要(会場に直接お越しください)
お問い合わせ:monthly@alce.jp(月例会委員会事務局)

社会文化的アプローチは、バフチンおよびヴィゴツキー理論によって、学習者の発達過程に関する知見を拡張していこうとする分析枠組みです。社会文化的アプローチでは学習者のことばの学習を、社会的文脈＝社会文化的枠組みによって構成されるものと規定する一方で、同時に学習を行う者自身の視点や解釈が既存の社会文脈を変更していくとしており、この双方向的な変化を捉える枠組みとして「対話」という視点に注目しています。(田島, 2010, p.12)《参考文献》田島充士 (2010)『「分かったつもり」のしくみを探る―バフチンおよびヴィゴツキー理論の観点から―』ナカニシヤ出版

本学会の会員には、上述したような社会文化的アプローチにおける言語観、学習観にもとづき、言語教育実践を展開されている方も多いのではないでしょうか。しかしながら、社会文化的アプローチの基盤となるバフチンおよびヴィゴツキー理論は、その難解な記述ゆえに、諸概念の十分な理解に相当な困難を伴います。そこで、本月例会企画は、教育心理学・臨床心理学の立場からバフチンおよびヴィゴツキー研究を展開されている田島充士さん（東京外国語大学）をお招きし、バフチンおよびヴィゴツキー理論をめぐり、対話する機会を設けます。具体的には、田島さんの論考を手がかりに、バフチンおよびヴィゴツキー理論と言語文化教育の関係に関し、参加者全員で対話します。まずは、参加者から田島さんに対し、下記の論文の内容に関する疑問をぶつけるところから、対話を始めlw　たいと思います。必ず事前に論文を読んだうえで、ご参加ください。

田島充士（2014）．ヤクビンスキー・バフチン・ヴィゴツキーの論にみるモノローグ・ダイアローグ概念の展開―社会集団の斉一性と人格の独自性とをめぐって『ヴィゴツキー学』別巻 3，1-20
http://hdl.handle.net/10108/87544

田島充士（2016）．言葉の理解およびその教育可能性をヴィゴツキー・内言論から捉える―スタニスラフスキー・ポドテキスト論を補助線として『ヴィゴツキー学』別巻 4，45-57
http://hdl.handle.net/10108/87545

講師：田島充士（たじま　あつし）さん
2006 年筑波大学大学院博士課程人間総合科学研究科心理学専攻修了。博士（心理学）、学校心理士。専門は、教育心理学、発達心理学、臨床心理学。現在、東京外国語大学大学院総合国際学研究院准教授。※研究業績等に関しては、下記の URL をご参照ください。http://www.tufs.ac.jp/research/people/tajima_atsushi.html